怪人の眼

田中貢太郎

小坂丹治（たんじ）は香美郡（かみごおり）佐古村（さこむら）の金剛岩（こんごういわ）の辺（ほとり）で小鳥を撃っていた。丹治は土佐藩の侍（さむらい）であった。それは維新のすこし前のことであった。

秋風が山の木（こ）の葉（は）を吹いていた。丹治は岩と雑木（ぞうき）に挟まった径（みち）を登って、聳（そび）え立った大岩の上へ出たところで、ふと見ると、直（す）ぐ上の方の高い黒松の梢（こずえ）に一羽の大鶴（つる）がとまっていた。

「おう、鶴がおるぞ」

丹治の眼は思わず輝いたが、鶴を捕（と）ることは禁じられていたので彼はしかたなく諦（あきら）めたものの、まだ二羽位しか小鳥の獲物を獲（と）っていないうえに、矢比（やごろ）が非

常に好いので諦めて去ることができなかった。彼は銃を握りしめたままで鶴の方を見ていた。と、鶴は羽をばさばさとやりながら松から放(はな)れて空高く飛んだが、すぐまたぐるりと引返して来て元の枝へとまった。

「初めよりも撃ちよくなったぞ、撃ちたいな」

丹治は惜しそうに鶴を見詰めていた。

「撃ったら知れるだろうか、俺より他に、何人(だれ)もいそうにないぞ、こんな山の中じゃ、鉄砲の音は聞えても、鶴(つる)を撃っておるやら、鵯(ひよ)を撃っておるやら、わからないだろう、そうじゃ」

丹治はその鶴を人に知れないようにそっと撃とうと

思いだした。彼は銃を持ちなおして雑木(ぞうき)にかくれて松の下の方へ往った。そして、覘(ねら)いを定めて火縄を差した。強い音がして弾(たま)の命中した手応(てごた)えがあった。丹治は大きな獲物の落ち来(きた)る刹那(せつな)の光景を想像しながら鶴の方を見た。鶴は平気で長い頸(くび)を傾(かし)げるようにしていた。丹治は眼を瞬(みは)った。

「たしかに手応えがしたぞ、何故(なぜ)落ちないだろう」

鶴は依然として暢気(のんき)そうに頸を傾げていた。丹治は鬼魅(きみ)悪くなって来た。朝山を登る時路傍(みちばた)の赤い実のついた茨(いばら)の中から、猿とも嬰児(あかんぼ)ともつかない怪しいものが、ちょろちょろと出て来て、一眼(ひとめ)じろりと丹治の

顔を見た後(あと)で、また傍の草の中へ入ってしまった。丹治はそのことを思いだした。

「今日は、朝から、不思議な日じゃ」

丹治はもう山におるのが厭(いや)になった。そこから向うの渓(たに)へ降りる捷径(ちかみち)が岐(わか)れている。丹治は銃を引担(ひっかつ)いでその径(みち)の方へ往きかけた。鶴は動かなかった。

「今日はよっぽど悪い日じゃ」

径は直(す)ぐ渓間(たにま)の方へ低まって往った。丹治は眼を渓の下の方にやろうとした。赤い靄(もや)が眼の前を飛ぶような心地(きもち)がした。渓のむこうも己(じぶん)の立っている周囲(まわり)も、赤い毛氈(もうせん)を敷いた雛壇(ひなだん)のような壇が一面に見えて、そ

の壇の上には内裏雛（だいりびな）を初め、囃子（はやし）、押絵（おしえ）の雛がぎっしり並んでいた。渓の上の方も渓の下の方も、眼に見える限りは一面の雛壇になっていた。丹治は眼が眩（くら）んだようになった。

「このままにしてはおられん、どうでもして逃げねばならん」

丹治は銃を持ち直してその台尻で叩き叩き下へ下へ走った。足に触（さわ）った雛壇（ひなだん）は足をあげて力まかせに踏みにじった。足の力が余ってひっくりかえることがあった。

「くそ、くそ、負けてたまるか」

丹治は狂人（きちがい）のようになっていた。　彼はやたらに銃を揮（ふ）り廻した。

「くそ、くそ、くそ」

何時（いつ）の間にか丹治の体は雛壇の中から出ていた。　丹治はふと足を止めた。　藁葺（わらぶき）の家が直（す）ぐ前にあって人の声が聞えた。

「茶でも飲ましてもらおう」

丹治はその家へ入って往った。　二時（やつ）過ぎの陽（ひ）が門口（かどぐち）に一本ある柿の木を染めていた。　一人の老人が庭前（にわさき）の蓆（むしろ）の上で縄を綯（な）うていた。

「茶を一ぱい飲ましてくれ」

老人は縄を綯う手を止(と)めて顔をあげたが不審そうに云った。

「旦那はどうかなさいましたか、顔色が悪いじゃありませんか」

丹治も今あんな目にあったから己(じぶん)の顔色が悪いだろうと思ったが、何か飲まないとゆっくりそれを話すことができなかった。

「みようなことがあったが、それは後(あと)で話す、まあ一ぱい茶を飲ましてくれ」

老人は頷(うなず)いた。

「よろしゅうございますとも」

と、云って家の中の方を揮り返った。

「おい、お侍さんが、お茶を飲ましてくれと云うから、早う一ぱい汲んで来い」

丹治は老人の傍にある藁打ち台の石の上に腰をかけた。息子の嫁らしい小柄な女が盆へ茶碗を載せて土間の口から出て来た。

「ああ汲んで来たか、そこにお出でになるお侍さんにあげるが好い」

老人が腮で指図をすると、女は黙って頷きながら丹治の前へその茶碗を持って来た。丹治はちょと俯向いてから急いでその茶碗を執りあげて一息に飲んだ。

「これはありがたい」
丹治は手にした茶碗を盆の上に返した。老人はそれを見ると、
「お侍さん、どんなことがありました」
「今朝、山へあがる時に、茨の中から、猿とも嬰児とも知れない者が出て来て、俺の顔を見るなり、草の中へ隠れたから、今日は朝からみょうな日じゃと思っておったところが、この山の上へ往くと、鶴が松にとまっておる、鶴は捕られんことを知っておるが、他に何人もおらんし、かまうまいと思うて、焼き撃ちにするように撃って、手応えもあったが、鶴は平気な顔をして、

動きもしなければ飛びもせん、朝のこともあるし、今日はろくなことはないと思うて、渓（たに）の方へおりかけてみると、その辺一面が雛壇（ひなだん）になって、雛が一ぱいに見えるじゃないか、びっくりして、その雛壇を、この鉄砲で、叩き割りながらやって来たところが、この家が見えだすと、雛壇が無（の）うなった、それにしても、今日はみょうなことだらけじゃ」

　丹治はこう云って疲れたように息を吐（つ）いた。

「そうでございますか、それは容易なことでない、今日はもう何もなさらずに、これからすぐにお帰りになるがよろしゅうございます」

老人は慰めるように云った。丹治ももう猟（りょう）をする気はなかった。

「ああ、もう帰る、今日はもう何をするのも厭（いや）になった」

「それがよろしゅうございます、こんな日に、ぐずぐずしよると、まちがいが起らんものでもありません、早うお帰りなさいませ」

「帰る、帰る、もう厭になった」

女が二杯目の茶を汲（く）んで来た。

「もう一ぱい如何（いかが）でございます」

「これはありがたい、では、もう一杯もらおうか」

丹治は二杯目の茶碗を貰ってまたそれを飲んだ。彼の心は落ちついてきた。彼は帰ろうと思いだした。

「どうも厄介になった、それでは暇をしよう」

丹治は老人に別れてその家の前を降りて往った。粟や蕎麦の畑が路の左右にあった。畑のしもの方には、人家の屋根がそこに一軒ここに二軒と云うように見えだした。ちょうど路の曲り角を曲ったところで、むこうから来た背のばかに低い体の幅の広い人に往き会った。それが蟇の歩いているような感じのする男であった。丹治は厭な感じがした。そして、その男とすれ違う時、ぎらぎらする二つの眼が丹治の方を睨むように

光った。丹治は二た眼と見返すことができなかった。

丹治が怪異に逢った噂は何時の間にか知人の間に拡まった。土佐藩の有志で有名な小南五郎右衛門は、某日路で丹治に会うとその実否をたしかめようとした。丹治はしかたなく打ち明けて最後にこんなことを云った。

「鶴も、雛壇も、それ程でもなかったが、背の低い男の眼は、今に忘れません」

底本：「伝奇ノ匣6　田中貢太郎日本怪談事典」学研M文庫、学習研究社
　　　2003（平成15）年10月22日初版発行
底本の親本：「日本怪談全集」改造社
　　　1934（昭和9）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2010年10月20日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、

校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。